

変化する風景への思い

文人の 武蔵野

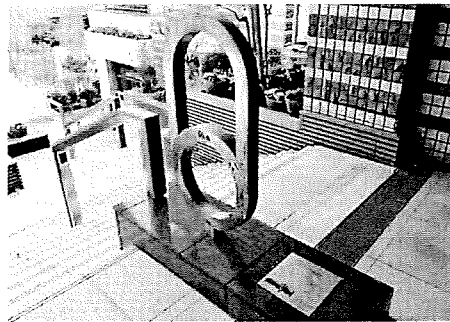
皆さんは、今の生活の風景が、このまま未来まで続けと信じていることができますか？昨日と同じように最寄りの駅に電車は見えますか？ 勤め先は来年も今年と同じように営業できるでしょうか？ 日々、私たちの生活とその風景は変化しています。人為

三浦朱門 ③

的なものに限ってもいろいろな変化があり、絶対悪だと認定されて改善される事象もあれば、喪失感や傷心、痛苦をともなう変化も少なくないと思います。

ただ、直接の当事者でなければ、変化の背景を想像して腑に落ちることが難しい場合もありそうです。同じ変化でも、発展だと捉える人もいれば、暴力だと受けとめる人もいます。

三浦朱門の小説「武蔵野イ



ンディアン」には、先住民の立場から「東京白人」に向けて武蔵野中心主義が提示されています。登場人物の一人で神主の榎本は、祖先が「何百年も昔から、武蔵野に住みついて」いたと作中で紹介され

「甲武鉄道始点の地」の碑。作中では登場人物が1906年に国有化された甲武鉄道についても議論する（1月、千代田区のアイガーテンエアで）

ています。榎本は「江戸」は「新開地」として「よそ者の作った城下町」であり、「富士山のできる前の武蔵野はエデンの園であった」と語りま

人為的な変化に対する否定的な受けとめ方が含まれるそのラジカルな言葉は、物語の中で太田久男という主人公の作家に向けられます。太田の立場は「インディアン」ではなく「東京白人」です。

「だけど、君たちインディ

アンが、どうして東京白人のおれを呼んで、すき焼を食わしてくるんだ」「うん、つまりね、われわれの声を代弁してほしいのさ」というやりとりがあるように、聞き役である太田は「武蔵野インディアン」の代弁者たることを期待されています。代弁してほしいという「われわれの声」とは何でしょうか。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

